

OPINION

4月初旬からこの連載は開始され、ちょうど半年となる。紙面に穴を開けることなく、一安心している。前回までに13カ国の記事が掲載された。月曜掲載なので月1回の新聞休刊日があり、月に3回強となる。米国ハワイ、スイス、フィンランド、メキシコ、英国、ウクライナ、ルー

ナビゲーター

マニア、カナダ、カザフスタン、インドネシア、ロシア、モンゴル、イタリヤ、米国(本土)の14カ所(13カ国)を紹介できた。

コロナウイルス蔓延下で、海外から生の声を伝えるのが連載目的である。日本人ではなく、世界各地で生まれ暮らす人がどのようにコロナ禍

連載を振り返って

○ ○ 22

と戦っているのか語る、というものである。日系企業勤務の外国人執筆は1回だけである。

報告からは、ワクチン接種の進む国とそうでない国のちがいが明確で

他方、多くの点で共通点がみられる。ほとんどの国はロックダウンされた。コロナ禍の影響で、経済的な

困難に直面するものの、そこで暮らす人たちは楽しみを見いだしつつ、

困難に立ち向かっている、つまりコロナと共存している。我慢しつつも将来への希望を語っている。さらに

大国より、比較的小きな国の対応がより効果的であるように感じられる。はつきりするの、着々とコロナ

以降への対応がなされている点ではないか。変化への対応は新しいチャ

ンスへの可能性と認識されている。積極的な事業発展に寄与する投資が継続されているようだ。とはいえ企

コロナ前に戻らず適応力で開く未来

あった。先進国あるいは大国は比較的順調だが、小国はそうでない。国々の方針はことなり、2回目接種より1回目接種率を高めて、拡散を防

ごうとする国がある。経済的支援は各国でなされているが、女性事業者

がより支援不足を感じているなど新たな視点が盛られていた。

対応策が、政治との関係で右往左往している点など。

公的支援は迅速ではあるが、対応が十分ではない。日本の対応も十分という声

が大きい。大半の国でも同じ傾向のようだ。経済支援はなされるものの、有効性について疑問が残るとする。とはいえ経済的には

業破綻への懸念は強く、どのように持続的な事業継続をするのかが追究されている。アメリカ大陸では、カ

ナダ・米国・メキシコの有力3カ国が経済的な結束を強めて乗り切ろう

としている。同時に、コロナ禍以前には戻れないという指摘がある。復元は、適応

性いかにかかるとも。見えない敵に立ち向かうことのむずかしさが、どこでも強調されていた。

記事は2回にまたがるものが6編ある。英文で500〜800語と依頼しているが、翻訳すると字数が増え2回にわたらざるをえない。アジ

ア系が少ないのは、執筆予定者自身がコロナに感染して入院、隔離されたり、政情不安のイランの予定者は期間中にカナダへ移住してしまっ

たなどが原因である。執筆者は男性8、女性6名のほぼ半分ずつだが、次第に女性比率が高まってきている。今月からの下期(来年3月まで)は、アジア、アフリカからの報告を強化予定である。

連載に関して、国や内容などでご要望があれば、お知らせください。(月曜日に掲載)

リポートコロナ禍に立ち向かう

世界のいま~日本への提言~

(編集・翻訳 リーム中産連)